

蔬菜品種改良の

めあて

中原 忠 夫

雪がちらほら降つて来ると、圃場の跡片附に忙しく働きながら、またいつものように、途中で投げ出した仕事のこと、もつとついでみだかつた仕事のことを思い巡らされる。ここ数年の間に北海道の園芸界は品種の面から見ても、栽培技術の点についてもかなり進んで来た。そしてとかくわれわれの仕事がおくれがちに見える。実際品種改良、種苗の原々種の生産に当つては、すでにしておくてしまつた目標を金科玉条として努力している場合がある。われわれのところでもトマト、茄子の一代雑種の組合わせの検索に手をつけているが、両種とも整理に整理を重ねてもなお七〇〜八〇の品種、系統の維持を続けている。

これだけでも可成な仕事であり、またこれだけの品種、系統を栽培して見れば一概に一代雑種の組合わせの優劣は決めかねる。そして結果は必ずしも期待したものとは限らないのであるから、何をやつているかと尻たたきされても、上達したバチンコ師のようにある確率でジャラジャラというわけには行かない。

最近では輸送園芸が相当進んで来て、以前

は単に早場物の出荷が経営上有利とされてきたが、全くの時期はずれのものが遠く内地から店頭に並ぶようになると、蔬菜の経営もなかなかむづかしくなつて来て、何か良い品種がないかと常に問題になる。そしてその言葉が蔬菜農家の挨拶のようになつて来ている。有利な経営をするためには、優良な品種、新しい品種を採用することも一つの方法であるが、ここにも色々な問題がある。従来優良な品種としては、形質が揃つていて品質が良く、収量の多いことが挙げられていた。ところが有利な経営のためには、市場に出荷して現金収入が多くなければならない。

優良な品種であつても、必ずこの点を充たしてくるとは限らない。甘藍の中生サクセションはその例で、肉質も良く結球も整一で北海道の夏場の甘藍としては重要なものであつたが、極早生の早出物が内地からの移入と、多くの人のねらいどころの一つとなつていて、育苗経費がかかる割に高価に出なくなつたので、早生種の大球晩出が進み八月中旬まで出荷されるようになり、引續いて札幌の早生系が結球したもの

から順次出荷されるので、サクセションのように結球が整一で五日も置くと裂球する品種は、道内の市場では有利でなく、また四葉胡瓜は品種独特の特異な形質から、品質は極めて良く、育苗栽培にしても、直播しても作り易いものであるが、市場への普及性がないため高価にうれない。収量が加賀に較べて少いので、どうしても大量に栽培するわけには行かない。このように必ずしも優良な品種、新品種が経営上有利とはいえないのである。

さらに問題になることは、われわれがよく巷間で聞くことであるが、A地区のAが、ある品種を作つて非常に良い結果が得られたのを、B地区のBが見に来て、翌年まねてやつてみたが思ふような結果が得られなかつたということである。勿論AとBとの技術の点も問題になるが、たとえ品種に対する播種期から肥培管理法を習得したにしても、同一の結果が得られない場合が多い。これは品種そのものの気候土質に対する適応性が異なるためであつて、最近のように競争がはげしくなり、如何に有利なものを作付するかということが切実になると、このような傾向が甚しくなつて来ている。現に札幌近郊の蔬菜地帯である山鼻、白石、琴似地区では、甘藍なり茄子、トマトを見ても使う品種が異つて来ている。山鼻地区は比較的乾燥しやすく瘠瘠であるのに、白石地区は潤潤で耕土は深く肥沃である。そしてこれらの地帯で採用されている品種についてはさらに、系統が問題になつて来ている。例えば茄子の民田にしても、人蔘の

五寸にしても、同一品種名だからそれで良いというものではなく、系統によつて生態的特性に相当の差があり、良い系統を選択することが重要な問題となつて来ている。

元来生態的特性の研究は東京大阪等の大市場の要求で、葉根菜の周年栽培により端境期をなくしようとする試みから出発したものであるが、有利な経営をするために、適地適作、耕種法の改善から、専業農家の関心も強く今後ますます進む傾向にある。以上のように品種に対する考え方が進んで来ているので、品種改良の目標の選定、試験の方法がむづかしくなり、改良された品種の適用範囲がせめられて来ることはわれわれのなやみである。しかし一面、一代雑種にしる人蔘、甘藍その他の種類にしても改良しなければならぬ一般の問題は山積している。次に主な種類をこの点について検討してみることとする。

一代雑種

最近北海道でも果菜類の一代雑種がかなり普及して来た。特に茄子、トマトの一代雑種は各種病害に対する抵抗力が強く、収量も多いので著しく伸びている。主として作られている一代雑種は茄子は橘真、葛真、蒂真、金井新交、河野。トマトは福寿二号である。これらの一代雑種は府県にて作られたものであつて、先にのべたように橘真の組合わせに使う橘田、真黒にも多くの系統があり、一代雑種を採種する業者によつて組むに使う系統が異なるので、同一名の橘真でもかなり形質の異なるものが出来ている。そして府県では最近真黒に樹性の

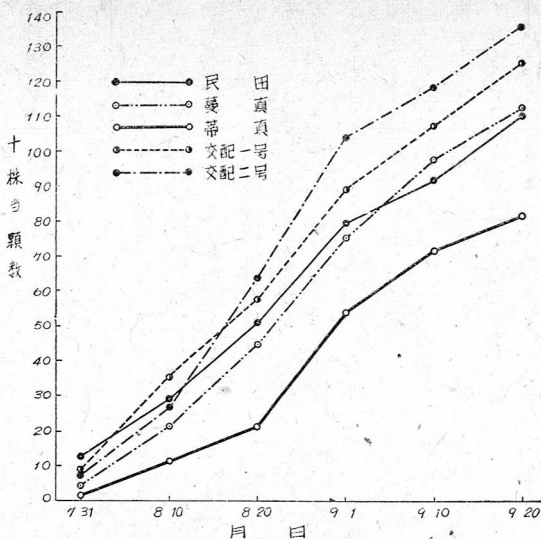
立つ早生真黒が多く使われるようになり、橋田には果形と色が特に問題となるので晩生系が使われるようになって来ている。

元来茄子は高温性の植物で、育苗期間も長く、育苗にも技術を要する。今年のような冷害型の気象状態は稀にしかないとしてみても、定植時期に冷温に会うことはたまたまある。従つて府県の一代雑種をそのまま利

燥、赤ダニその他の障害に弱いので早く衰弱する傾向が強い。この品種のみ単一に作付することは出来ない。

今年の九月始め札幌近郊の専業家が茄子の一株当り収穫顆数を調べてみたところ、民田が十五個位収穫されているのに葛細十個位、葛真五〜六個、橋真三〜四個で、民田は橋真の四〜五倍の収穫顆が数えられ、たとえ橋真は大顆もぎが出来ても問題にならない。

茄子の収穫顆数比較表（第一圖）



用しては、特別の環境地帯、育苗技術の進歩したところを除いて、定植期から着果まで生育がおくれ早期収穫が望まれない。茄子、トマトの早期収穫の遅延はかなり経営上の欠点となるので、民田、葛細の極早生種がかなり作られている。しかしながら民田、葛細は果形が小さくて果皮がかたく、しかも枝條が拡がり、枝が垂下し易く、乾

採り、d 初夏播秋採の形で行われ、用いる品種が夫々異つて来ている。北海道の栽培は五寸、太人蔘系の品種による五月播、九月から十月にかけての収穫が一般的であり、これらの品種は府県への適用範囲が極めて狭くなつて来ている。

府県では秋から冬にかけてのビタミンAの補給は他の葉菜が多量にあるので問題にならないが、五月〜八月にかけてのビタミンAの補給は他の葉菜が多量にあるので問題に

たえ橋真は大顆もぎが出来ても問題にならない。

雪印種苗藤の沢農場で選抜された系統の組合わせに第一図のような成績を得ている。（成績は二十七年、葛真、葛細は内地種苗商生産のもの）

人蔘

人蔘は貯蔵野菜として重要なばかりでなく、採種環境が適しているの

で、府県への種子供給地として重要である。しかしながら内地の栽培が、

a 夏播冬採り、b 冬播初夏採り、c 春播夏採り、d 初夏播秋採の形で行われ、用いる品種が夫々異つて来ている。

最近八月末から九月始めにかけて早出人蔘が府県に相当量出荷されているようであるが、もう少し早めに収穫出来て、形の揃つた色の良い系統が育成される必要があると考えられる。次に問題になるのは耐病性の点で、盛夏から初秋にかけ葉枯病にかかつてない圃場は見られない位発生が多く、長根種は比較的被害少なく五寸系に甚しい。さらにネマトーダの被害も甚しいものであるが、耐病性品種の出現が夢でなくなつてほしいと思う。

甘藍

甘藍はさきにも述べたように生態特性的の研究が進んだ蔬菜の一つで、すでに各地帯の栽培型に適応した品種が確立して、従来見られた府県への種子の交流も行われなくなり、道内を例にとつても、道内を一円とした種子の動きも少なくなつてきている。このことは部分的環境に適応する生態的系統の選出という方向に進んできていくと見るべきで、最近の品評会を見てみると〇〇甘藍と個人名を冠した品種名が多くなつて来ている。この点に関し静岡農試の篠原氏は同氏の著書「甘藍」で次のように述べている。

として大栽培に発達するものであるから、栽培のある所には必ず育苗種があり、採種がなければならぬことである。すなわち激しい市場競争に打勝つて、品質の良いものを安価に、しかも栽培者も儲るような正しい最高度の栽培を確立するためには、その土地の微細な生態因子に最もピッタリ適応し、かつ出荷先の市場嗜好に最も合致した品種系統を得ねばならぬ。そのためには「その土地、その栽培に適した品種系統をその土地でその栽培に最も精通した人により最も綿密な育苗が行われねばならぬ。」他の土地のものでは、いくら優良な品種であつても、このようにその土地にピッタリした品種とはならないからである。すなわち最も進んだ園芸を樹立するためには、育苗が伴わねばならずしかもその育苗はその土地その栽培で行わねば、要求されるような高度な適応形は得られない。いいかえれば育苗は栽培者自身のものであり、他人を頼つても決して満足は出来ぬのである。」

北海道では氏のいわれるような大栽培は見られぬが、その傾向にあることはすでに述べた。仮定に立てた生態型の育苗は考えられないが、北海道で最も重要な品種札幌甘藍について見ると、熟期に幅があることは市場条件等からさほど問題にならないかも知れぬが、まだその特性は幅の広い混交状態で、〇〇系と称するものにも変異が多い。従つてこれらの因子を分系して素材として提供することが必要ではないかと考えられる。さらに甘藍についてはばかりではないが、欧米各国から優良な品種の導入を積極的に計つて、栽培上問題のある諸条件に適合した品種を紹介することも大切である。

（筆者は雪印種苗、藤ノ澤育苗場在勤）